



ワードプロセッサ

～OA機器の革命児はいま～

渋谷SAGAS渋谷本店で販売される中古ワープロ。美品が多く、液晶画面にも不具合はない。価格は2万円台から9万円台まで様々

第64回

探訪昭和遺産

取材・文／藤木TDC
撮影／金子靖

ワードプロセッサ。略してワープロ。今でもパソコンソフトの一種としての響きをとどめるが、ハードウェアとしての専用機はすでにほぼ絶滅したと思っていた。

ところが東京・渋谷に専門店があると聞き、訪問すると、おお、ズラリと並ぶ懐かしのワードプロセッサ。東芝ルポ、シャープ書院、富士通オアシス、NEC文豪……80年代、会社の事務机を占領したあのメカたちが、まだこうして生き長らえていたとは！

昭和最後のヒット商品は約20年で姿を消した

東京・渋谷にあるOA機器専門店「SAGAS」は中古ワープロ販売にワープロを使っている日本最大

のショップだ。店頭在庫数は約200台、どの商品も新品はもう生産していない。同店のワープロ担当・篠原浩さんが説明する。

「もともとは新品を販売していました。専用機は2000年ぐらいから生産終了していった、この10年でメーカーのサポートもなくなりました。ところが当店でワープロを購入したお客さんの中に、まだ使い続けていらっしゃる方が相当数います。社での使用はなくなっても、多くが趣味で使っている方ですが、どうしてもワープロでないと、という相談をフォローしていたら中古販売につながったんです」

昭和最後のヒット商品といえるワープロは1978年に実用機が登場した。卓

上式日本語印字機が和文タイプしかなかったわが国において、ワープロの登場はオフイスの革命だった。80年代に爆発的に普及したワープロだが、専用機の生産期間は短く、90年代にパソコンが普及すると、あっという間に姿を消した。パソコンの一機能として吸収されたと思われたワープロがこうして残ったのはなぜか？

美しさとタフさをもった究極のガラパゴス製品

ワープロはメーカーごとに操作方法が異なり、データの互換性もない。その上フロッピーディスクに記録したデータをパソコン用に変換する作業も煩雑だ。ゆえにパソコンへ乗り換えなかったユーザーにとって、使用するワープロが故障した場合、同じメーカーの中古品に買い替えるのがもっとも手取り早い。

「そうしたシステムやサポートに絡む問題も多々ありますが、ワープロにこだわる人は変換力の優秀さや印刷のスピード、フォントの美しさを好んで使っている

んです。海外主導で開発されたパソコンと違って、ワープロは国内メーカーが日本人の使用感に集中して技術開発競争をしたので、パソコンよりも美しく日本語を打てるよう進化したんですよ」(篠原さん)

日本語ワードプロセッサは、海外需要がまったくない究極のガラパゴス製品でもあったのだ。そしてそれゆえにデッドストックもなく、現状、仕入れは中古品の持込み買取りに頼るしかない。劣化部品も旧国産車と同様に、ジャンク品から取り回している。

その一方、20年近く前に生産された中古機種が、今も不具合なく動作するタフな面も国産製品ならではの特性といえる。

「インクリボンやフロッピーディスクなど、消耗品もまだなんとか生産されています。石原慎太郎元都知事など、いまだワープロで文章を書かれる有名作家も少なからずいらつしゃると聞きます」(篠原さん)

ワープロ、それはもともと日本人のガラパゴス製品といえるかもしれない。



壮観！ズラリと並ぶ中古ワープロ。いまだ需要は途切れることがない



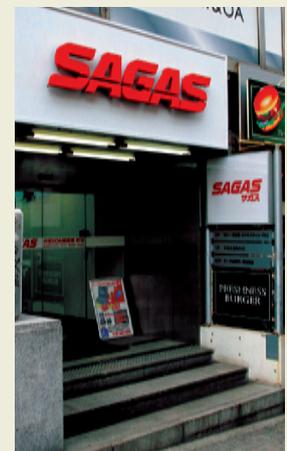
インクリボンや感熱紙、FDも販売されている



押入れの中古ワープロが意外な高値の可能性も



懐かしや、PC時代に消えた「親指シフト」機も。ワープロ検定では常に「親指シフト」が上位だった



地下1階のフロアでワープロ販売